

食のタブー（禁忌） レビ記 11 章

「あなたがたは、それらの肉を食べてはならない。またそれらの死体に触れてもいけない。それらは、あなたがたには汚れたものである。」(11:8)

外国の方と食を共にする時には、細やかな配慮が必要です。食習慣や宗教的習慣が大きく異なることもあります。個人の健康状態や好き嫌いなども影響してきます。たとえ、もてなす側が最高のものと考えて用意したとしても、相手には受け入れられない場合があります。しょう油・味噌の大豆系にアレルギーがあるなら、ほとんどの日本食は駄目ということになり日本食の良さをわかってもらうのは難しくなります。肉が好きな国民性と思っても、まれに菜食主義者であったりすると、おもてなしのプランの見直しが必要になってしまいます。

なかでも禁じられた食材がごくわずかに混入しても許されない、宗教的な食のタブーに出会うと、その宗教の信者でない者からみれば、不可解としか思えません。なぜこの宗教は豚の肉はだめで、別の宗教は牛の肉は駄目なのかなど、理解に苦しむこともあります。しかし「おもてなしの国」として宣言した国の国民として、多様な食習慣や文化、それぞれの好みなど、わかる範囲で心細やかに相手を理解して、接することは、社会的にも、宗教的にも大切で、最終的には善い効果を生みます。自分の都合を押しつけず、相手の立場、より高い立場から役立ちを考えることは、私たちの宗教的生活の目的の一つであるからです。

さらに、宗教的な戒律から、あるいは神がそう言われたから、戒律を守るという姿勢は、立派であり、尊敬に値します。そのように相手を考えることから相互理解は深まってゆきます。しかし、頭から否定するのなら、そこで入り口は閉じてしまい、より崇高な目的を共有することなど、とても望めなくなってしまいます。

さて、本日の学習、レビ記 11 章には、現在のユダヤ教徒、ひいてはイスラム教徒の禁忌のもとになっている戒めがあります。この章の内容は自然科学から見て、おかしい部分があるという方もおられますが、私たちはそれを踏まえた上で、神のみことば、メッセージとして矛盾のないよう霊的に解釈して、さらにそこから深い生きる糧を求めましょう。

著作がレビ記 11 章の個々について言及している箇所は、ごくわずかですが、全体については、黙示録解説の一部に書かれています。

「獣は情愛を意味し、ある獣は善い情愛を、他の獣は悪い情愛を意味し、・・・そしてこれはどの獣が、適切な善い情愛を表し、どの獣が不適切な悪い情愛を表しているかを意味しています。」(黙示録解説 617-28)

タブーとされているのは、食べ物のことではありません。人がいだけ汚れた情愛なのです。その情愛を抱いた時に、起こることも含めて、主は「口に入る物が人を汚すのではなく、心と口から出るものが人を汚す」(マタイ 15:17,18) と語られています。

それでは、食べてはならないものになぞらえて、自分のものとしてはならない情愛とは何か、教義に照らしてわかる範囲で解釈してみましょう。

「動物のうちで、ひづめが分かれ、そのひづめが完全に割れているもの、また、反芻するものはすべて、食べてもよい。」(レビ記 11-3)

自然科学から見れば、動物のある種類は、環境の変化によって、太古の森林から草原に移らなければならなかったとき、草原には森林のように身を隠すものがないため、ただ速く走るだけが敵から逃げるための手段でした。馬もらくだも、ひづめが一本だけあるようにみえても、実は足の骨は本来5本でしたが、一本か二本という少ない足指で走るほうが速く走れるため、その足指の爪が進化してひづめとなって固くなり、使わない残りの足指は退化してしまいました。一本の足指の先で走り、一本の足指だけが進化したものが分類上、奇蹄類といわれ、ひづめが割れていないように見え、二本の足指が進化したものが偶蹄類とされて、二本あるため、ひづめが割れたように見えます。

さらに、草原に生い茂る草は、森で手に入る果物と違って繊維質が多く、消化が難しいため、腸内細菌の助けを借りる必要がありました。奇蹄類は、盲腸部分で草を発酵させ腸内細菌で消化します。偶蹄類は複数の胃で、胃と口を繰り返し行き来して発酵・攪拌させて消化します。こうしてみれば、自然科学的の論脈からは、食べて良い、悪いという根拠は見当らないばかりか、みことばを自然科学の論法でたどってはならないことがわかります。やはり食とは全く関係のない、何かしら霊的なことが述べられていることが明らかです。科学や私たちの日常会話の前提となっている自然的な見方から離れなければなりません。

爪やひづめは、皮膚が硬化・変形したもので、身体の究極的なもの、最も遠いものといえます。「しかし、より内的な意味で、ひづめによって意味されるのは、究極的レベルでの真理、すなわち最低の感覚的真理であり、その反対の意味では、偽りです」(天界の秘義 7229)。

そして「分かれ、完全に割れた」には、次のような意味が含まれています。

『分かた』とは消散することを意味します。その理由は、それは結びついていたものが、もし分割されるなら、消散してしまうからです。それは、人が自分の心を分割して、破壊してしまうのと同じです。人の心は二つの部分が結びついていて、その一つは知性と、もう一つは意志と呼ばれます。人がこの二つを分割するなら、それぞれの部分に個別に属するものは消散してしまいます。なぜなら、一方の部分は、もう一方の部分から生命を得ており、そのため一方が減れば、もう一方も滅びてしまうからです。善から真理が分離されたときも同様で、仁愛から真理が分離された時も全く同じです。これを行うなら双方を破壊してしまいます。つまり、一体であるべきものが分割されれば、すべてが減びます。」(天界の秘義 9093-1)

すなわち、ひづめが分かれ、完全に割れたとは、感覚的なものから生じた偽りが分離され、消散したという意味となります。わかれていないひづめのように、感覚的なものから生じた偽りを、完全に消し去らねばなりません。

感覚的なものから生じた偽り、これはかなり多く私たちに染みつき、なかなか離れません。新教会教義を

学び、偽りだと頭ではわかっている、生まれ育った環境や伝統から、輪廻転生はあるのではないかとどこかで信じていたり、人の死は身体の死ではなく、善と真理の破壊と喪失であるとわかっている、身体の死を霊的な死よりも恐れたり、人は見た目ではないとわかっているながら、つついその人の行いの結果や目的を見つめないで、ただ見た目や社会的地位・評価だけで人を判断したりします。感覚的な迷妄から発生した偽りを自分のものとしてはならない、そこから完全に離れなさい、と主は命じられています。

それでは、もう一つの反芻とは何を意味するのか、天界の教えに尋ねます。

「記憶は、ある動物が持つ反芻胃になぞらえることができます。・・・食べてそこに送られたものは、そこにある限り、本当の意味で身体にあるのではなく、外側にあります。・・・それを思考によって取り出し、いわば反芻することによって、霊的な心の養分となります。意志の愛はこれを求め、これに飢え、養分を求めて真理を抽出しようと駆り立てます。

もしその愛が悪であれば、汚れた思考を求め、それに飢え、他方、善であれば、清い思考を求め、飢えます。もしその思考が適したものでなければ、除外し、はねつけ、様々な手段で退けます。」(神の摂理 233[8])

学んだつもりでも、身につけていないことがよくあります。特に宗教的な事柄、真理は、よく理解して、実を結ぼうという意志に進まない限り、単なる知識(記憶知・科学知)として、身体の外側に留まっています。愛すなわち意志こそが、その人間であるからです。自分のものとするためには、学んだ知識を鵜呑みにせず、よく考え、様々な角度から吟味しなければなりません。飲み込む前によく吟味し、消化しきって、確信にまで至らなければ、信仰とはいえません。でなければ、「にせ預言者」にだまされます。ある人がそう言ったから、著作にそうあるから、とすぐ鵜呑みにせず、吟味し、深く思索を何度も繰り返す過程で、ゆっくりと自分のものとなってゆきます。もしそういう機会が与えられれば、必ず実行するという段階に近くなるとはじめて確信・信仰といえます。真理は、神の愛の形であり、それは人間の本来持つ愛とは異なっているので、それぞれは対立し、本来人間の側には消化しにくいものです。何度も反芻という作業を繰り返さなければ、決して自分のものとはなりません。

レビ記 11 章は、続いて、らくだ、岩狸、野うさぎ、豚を挙げてゆきます。らくだと豚は著作に出てきますので、先に挙げます。

「らくだの内意は、自然的人間の概括的な記憶知で、そこから真理への情愛が生まれ、合理的なものにある善の情愛に導入されます。これが通常の道です。真理に関する合理的なものは、記憶知、そして知識なしには生まれず、完全にされないからです。」(天界の秘義 3048-2)

「らくだ」は「反芻するが、そのひづめが分かれていない」と言われ、これは、思索を繰り返しても、目的がなければ一般的な知識をもてあそぶだけで、その中にある感覚的なものからくる偽りが分離されません。

単なる知識として手にとって眺めているうちは、膨大な滓とともに埋蔵されているダイヤ原石の鉱脈、精錬されていない金鉱を見ているのと同じです。ダイヤは鉱脈を見つけ、そこからダイヤの原石を取り出し、砕き、熟練工がカットを加え、磨き上げてはじめて人が美しいと思うようになります。ダイヤの鉱山を所有したとしても、他の滓を除き、美しいダイヤを作りだそうという技術や努力がなければ、深く埋まっている石ころにしか過ぎません。まず目的意識を持ち、そこからダイヤ原石と他の石ころを分

別しなければ、いくら思索を深めても、得るものがありません。

豚は、「ひづめが分かれており、ひづめが完全に割れたものであるが、反芻しない」とされています。せっかくな感覚的な知識を分離してダイヤモンドの原石を得て倉庫にしまいこんでも、加工して、磨き込まなければ、これも意味がありません。次々と真理をあさって食欲にため込み、深く考えない姿は豚に似ます。なぜなら、豚とはあさましい食欲を意味するからです（黙示録解説 659-6）。

岩狸と野うさぎは、著作には出てきません。余談ですが、岩狸はピカとも言われ、アニメのピカチュウの原型かもしれません。しかし、あえて岩狸の「岩」を取りあげれば、マタイ福音書 13 章にあるように、撒かれた同じ種が、撒かれた場所によって異なる結果を生むことになぞらえることができます。「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。」（マタイ 13:5-6; マルコ 4:5-6）『岩地』は歴史的信仰を意味し、他人の信仰を自分のものとする、すなわちそれが真であると信じたからではなく、信をおいている人物がそう言ったからそう信じる」（黙示録解説 401-35）という態度です。それは他人のものに過ぎず、他人のものを分別する前に飲み込んでしまうなら、自分のものとはなりません。

野うさぎは、穴倉・洞穴を住处とし、「洞穴」は暗闇につつまれた曖昧さを意味します（天界の秘義 2935）。さらに野うさぎの原語は「ジャンプする」から派生しており、「いなく馬とジャンプする戦車」（ナホル 3:2）は「曲解した知性と同様の教義から」（天界の秘義 6978 参照）を意味するように、飛躍して曲解することを意味します。偽りを抱いたまま、あいまいな中で思索すると、そこからとんでもない結論が出てきます。

レビ記 11 章は、このほかにも食べてはならない、自分のものとしてはならない情愛をあげてゆきます。しかし重要なことは、食が人の身体を作るように、良い情愛だけを自分のものとして、本当の意味で、自分を大切にすることです。なぜなら、私たちは生命を受ける器にしかすぎませんが、二束三文の安い器ではなく、最高のものを受け取ることができる最高の器として創造されているからです。不潔な情愛を私たちが受け入れるなら、ゴミや汚いものなどを、国宝級の器に盛るのと同じことです。腐ったものをいつまでも盛り続けるなら、器も薄汚れてしまいます。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ 43:4）と主は訴えかけられています。そのため、汚れた情愛をその器にため込まず、ただ清いものだけを受け入れて、「あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしが聖であるから。」（レビ 11:45）アーメン。

レビ 11:1-12

それから、【主】はモーセとアロンに告げて仰せられた。

「イスラエル人に告げて言え。地上のすべての動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き物は次のとおりである。

動物のうちで、ひづめが分かれ、そのひづめが完全に割れているもの、また、反芻するものはすべて、食べてもよい。

しかし、反芻するもの、あるいはひづめが分かれているものうちでも、次のものは、食べてはならない。すなわち、らくだ。これは反芻するが、そのひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである。

それから、岩だぬき。これも反芻するが、そのひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである。

また、野うさぎ。これも反芻するが、そのひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである。

それに、豚。これは、ひづめが分かれており、ひづめが完全に割れたものであるが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。

あなたがたは、それらの肉を食べてはならない。またそれらの死体に触れてもいけない。それらは、あなたがたには汚れたものである。

水の中にいるすべてのもののうちで、次のものをあなたがたは食べてもよい。すなわち、海でも川でも、水の中にいるもので、ひれとうろこを持つものはすべて、食べてもよい。

しかし、海でも川でも、すべて水に群生するもの、またすべて水の中にいる生き物のうち、ひれやうろこのないものはすべて、あなたがたには忌むべきものである。

これらはさらにあなたがたには忌むべきものとなるから、それらの肉を少しでも食べてはならない。またそれらの死体を忌むべきものとしなければならない。

水の中にいるもので、ひれやうろこのないものはすべて、あなたがたには忌むべきものである。

マタイ 15:15-20

そこで、ペテロは、イエスに答えて言った。「私たちに、そのたとえを説明してください。」

イエスは言われた。「あなたがたも、まだわからないのですか。」

口に入る物はみな、腹に入り、かわやに捨てられることを知らないのですか。」

しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。

悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。

これらは、人を汚すものです。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。」

黙示録解説 617-28

「獣」は情愛を意味し、ある獣は善い情愛を、他の獣は悪い情愛を意味し、イスラエルの子孫たちの教会では、どの獣を食べて善いか、そしてどの獣を食べはならないかという表象的に樹立された法がありました。(レビ記 11); そしてこれはどの獣が、適切な善い情愛を表し、どの獣が不適切な悪い情愛を表しているかを意味しています。というのは善い情愛は人を清くし、悪い情愛は人を汚れさせるからです。この

章にある個別の獣と鳥、そしてそのひづめ、脚、反芻は、清いものを汚れたものから区別しており、重要です。